文学の通俗性と「文豪」

――明治・大正期における小説家のイメージ形成とその受容――

大橋崇行

一　「文豪」ブームと文学受容の「通俗」性

二〇二二年現在では比較的落ち着いてきたものの、二〇一〇年代には、「文豪」ブームと呼ぶべき現象がたしかにあった。その中心となったのが、二〇一三年一月にKADOKAWAのマンガ雑誌『ヤングエース』で連載が開始された、朝霧カフカ原作・春河35作画「文豪ストレイドッグス」（以下、「文スト」）と、DMM GAMESが二〇一六年十一月から配信しているゲーム「文豪とアルケミスト」（以下、「文アル」）である。

「文スト」は、二〇一六年四月から六月、十月から十二月、二〇一九年四月から六月にかけてテレビアニメーション版が放映されたほか、二〇一八年三月に劇場版アニメーションが公開され、女性を中心とした多くの読者を獲得することになった。これは、中島敦、太宰治、芥川龍之介といった「文豪」がキャラクター化された作中人物となり、それぞれが書いた小説の題名を冠した技で戦うというバトルアクションである。

一方の「文アル」は、ゲームのユーザーが「アルケミスト」と呼ばれる特殊能力者となって「国定図書館」に派遣され、文学の力を持った「文豪」たちを転生させて戦うことで、本の世界を破壊しようとする侵略者たちに抗うゲームであり、二〇二〇年四月から八月にかけてテレビアニメーション版も放映された。「文スト」が実際の「文豪」たちや小説テクストとはほとんど拘わりがなく名前だけを借用した形になっているのに対し、「文アル」のほうは作家の事跡を丹念に調査し、ゲーム内のストーリーやキャラクター造形に反映させていることに特徴がある。その結果、制作拠点がある金沢市の金沢文化振興財団をはじめ、武者小路実篤記念館、菊池寛記念館、小樽文学館、漱石山房記念館、さいたま文学館など各地の文学館とのコラボイベントが開催されたほか、新潮社が『「文豪とアルケミスト」文学全集』（全二冊、二〇一七～一八年）を刊行することとなった。[1] また、二〇一七年十二月の『日本古書通信』においてゲームのユーザーがモデルになった作家の手になる古書をグッズ的に収集するという事態も生じていることが報じられるなど、ユーザーによる文学テクストの受容においても大きな役割を果たしている。[2]

これら二つ以外にも、近代の作家やテクストを用いたコンテンツ

が、二〇〇〇年代半ばから二〇一〇年代にかけては数多く見られた。たとえば、各巻ごとに作家と小説テクストを取り上げ、そのテクストをモチーフにした物語を展開した竹岡美穂のライトノベル〝文学少女〟シリーズ（二〇〇六～一一年）や、近代文学をアニメーションとして翻案した「青い文学」シリーズ（二〇〇九年）、萩原朔太郎『月に吠える』、北原白秋『邪宗門』、室生犀星『抒情小曲集』、石川啄木『一握の砂』といった、詩人とその詩人の手になる詩集や歌集を擬人化したマンガである清家雪子「月に吠えらんねえ」（二〇一三～一九年）などである。特に二〇一五年から発売されているドラマCD「文豪シリーズ」（AIR AGENCY、フロンティアワークス）は、スピンオフである千船翔子によるマンガ版『文豪失格』（二〇一五～一七年）の監修を一柳廣孝が手がけるなど、近代文学研究の成果とも接続している。また実写映像でもテレビドラマ、映画で展開した「BUNGO　日本文学シネマ」シリーズ（二〇一〇～一二年）や、太宰治生誕百年として「パンドラの匣」「斜陽」「ヴィヨンの妻」「人間失格」が二〇〇九年から一〇年にかけて次々に映画化されるなど、「文豪」ブームと呼ぶべき状況が展開していたのである。

こうした流行について服部このみは、二〇〇七年以降、特に集英社文庫が太宰治『人間失格』の表紙イラストを小畑健に、樋口一葉『たけくらべ』を河下水希に、中原中也『汚れっちまった悲しみに…』と宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を浅田弘幸に依頼したことで売り上げが急増したことに始まったものとしている。[3] また大杉重男は、「文アル」を中心に、こうしたブームの受容者が「BL萌えの女性たち」であると指摘する。[4] この他、二〇一八年三月十七日に開催された横光利一文学会第十七回大会の特集「文化資源（コンテンツ）としての文学」において「文アル」が取り上げられただけでなく、本稿の基となった二〇一八年度日本近代文学会秋季大会の特集「アダプトされた文学の可能性　平準化する人文知の受容現象を問う」では、「文アル」のプロデューサーである谷口晃平を交えて議論が行われている。

「文豪」ブームの状況が喚起するのは、文学を通俗的に受容することをめぐる問題である。日本近代文学における通俗性をめぐる議論としては、たとえば二〇〇六年五月に刊行された『日本近代文学』第七十四集の特集「文学にとって〈通俗性〉とは何か」がある。ここでは、前年に刊行された第七十二集で、「「通俗文学」や「通俗小説」はそれ自体でジャンルを形成することが可能なのだろうか。」という問いかけがなされ、[5] 読者論やジェンダー批評などを含めた新しい視点による分析が求められていた。その結果、松原真が仮名垣魯文「高橋阿伝夜叉譚」（一八七九〔明治十二〕年）において裁判記録や法律といった公的な文章が「通俗化」する過程を論じたり、[6] 鬼頭七美が菊池幽芳「己が罪」（一八九九〔明治三十二〕～一九〇〇〔明治三十三〕年）において、「批評界」ではなく「一般普遍の人士」というより広い「読書界」に小説を発信するというあり方が見られる問題を指摘したり[7]といった成果があったものの、論じる対象としてはあくまで「通俗文学」「通俗小説」が想定されていた。

一方で現代の「文豪」ブームが示すのは、こうした「通俗文学」

「通俗小説」と対置されてきた文学、いわゆる純文学へと連なる系譜におかれているテクスト群や、それらを手がけた作家の「通俗」的な受容の様態である。しかしこうした受容のあり方は、けっして現代にのみ特徴的に見られるわけではない。むしろ明治期から文学にはそうした側面は少なからず存在していたのである。さらにいえば、「文豪」という用語自体が、流通するようになって以来、そもそも文学の通俗性を内包してきたものではなかったか。

本稿では以上のような問題意識のもと、まずは明治期から大正期にかけて「文豪」という用語がどのように定着し、広がるようになったのかについて確認する。その際に、「文豪」という用語がどのような文脈を抱えていたのかを、雑誌や新聞といった活字メディアで編成された諸言説から読み取った上で、「文豪」言説に見られる文学受容の様態と、そこでの通俗性のあり方について考察を進めていきたい。

二　「文豪」の広がりと「少年」読者

まず、熟語としての「文豪」という言葉そのものについて確認すると、たとえば朱熹『宋名臣言行録』（宋代）巻四「楊億」において「頃刻之際、成数千言、真一代之文豪也。」とあり、わずかな時間で多くの言葉を文章を書いたことに対して、「一代之文豪」であると位置づける用例が見られる。しかし、これ以外にはほとんど確認できず、清代に入ってから『四川通史』（一八一五年）「第十三部文」に「太史公必登竜門探禹穴而後為文豪」と、文学における英雄という意味で用いられていることが確認できるものの用例は限定的であって、必ずしも広く流通していたものではないことが窺われる。

「文豪」という語が漢文脈ではあまり用いられず、江戸期以前の日本で広がっていなかったという状況は、これが明治期以降に翻訳語として流通するようになった可能性を示唆している。実際に広く見られるようになるのは明治二十年代以降であり、活字メディアの広がりとともに、特に海外の作家を指して流通、定着したと考えられる。

その中で比較的早い用例としては、『国民之友』編集人の人見一太郎がゼームス、ブライス原著、人見一太郎訳述『平民政治』（一八八九〔明治二十二〕年、原著は James Bryce, 1st Viscount Bryce, *The American Commonwealth*, 1888）を刊行した際、『東京日日新聞』（同年、十月二十二日）に掲載した広告が挙げられる。ここでは「コント派の哲学者、大学校の教授にして英国現今の文豪なるフレデリツキ、ハリソン氏の評に曰く」と、フレデリック・ハリソン（Frederick Harrison, 1831-1923）を「文豪」と評することで、ハリソンによって高く評価されたジェームス・ブライス（James Bryce, 1838-1922）の著作を読むべき本として位置づけている。また、渋江保（羽化仙史など）がまとめた文学史のテキスト『英国文学史』（一八九一〔明治二十四〕年）では、第三篇第四章に「自余ノ詩傑文豪并ニ其著作」という項目を立て、アレキサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688-1744）やエドワード・ヤング（Edward Young, 1683-1765）をはじめすぐれた詩人を「詩傑」、それに対し

て小説で優れた業績を残したダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）やサミュエル・リチャードソン（Samuel Richardson, 1689-1761）を「文豪」と称している。

渋江保の『英国文学史』が学生向けの参考書であることからも窺われるように、「文豪」という用語は青年期の読者による文学の受容と密接に拘わっていた。たとえば正親町季董「仏国文豪小伝」（『学習院輔仁会雑誌』第四十四号、一八九〇〔明治二十三〕年六月）は、当時十五歳だった正親町季董がヴィクトル・ユゴー（Victor-Marie Hugo, 1802-1885）の伝記をまとめた文章である。また、許斐熊太郎「大文豪大傑作」（『学園余芳』第十号、一八九一〔明治二十四〕年一月）では「大文豪の大作、独り顕然として勃発し、人心の幽裡を攪動し、感線を鼓叩し、貫道の的中を得るもの、其理明瞭として悟る可し」とあり、U. K.「新文豪」、『早稲田文学』（第六十七号、一八九四〔明治二十七〕年七月）では「若し現今世界に活動せる新思想新感情を知らんと欲せば、若し十九世紀より二十世紀に移らんとする社会の新風潮を知らんと欲せば、若し現に世に活動しつゝある大風潮を知らんと欲せば、現時の大なる文学を味ふに如くはなし。」とある。このように、「文豪」の文章を読むことによってこそより深く感動し、西洋から入ってくる新しい「思想」や、小説で描かれる現代社会、人間の「感情」に触れることができるという枠組みが示されたのである。

このとき、『早稲田文学』や『学習院輔仁会雑誌』はもちろん、『学園余芳』は柳川藩の藩校だった伝習館に由来を持つ柳河橘蔭学館学園（現在の福岡県立伝習館高等学校）の機関誌であり、これらはすべて近代的な教育制度によって設置された学校に通い学ぶ生徒や学生としての「少年」たちによって、あるいはそうした「少年」たちに向けて発信された言説である。したがってこうした発想は、単純に読み、学ぶということだけではなく、「少年」たちが文章を書くということにも接続していく。

本原著は西欧文壇の大家数十名に檄して作文の秘訣を問ひ其金声玉振の答案を編集し此を五題に分ちて附するに作家の経歴小伝を以てし加ふるに其意義を拡大にして之を明鬯ならしめたるものなれば、一読して西欧諸文豪の文に進めるの軌路を窺ふことを得べく、併せて文を作るの神髄を知ることを得べし、

（龍峯生「西欧文豪談」、『少年学術共進会』第四巻第八号、一八九三〔明治二十六〕年八月）

『少年／学術共進会』は博文館の少年雑誌『日本之少年』の号外という位置づけで刊行され、学校の生徒としての「少年」たちによる投稿記事を多く掲載していた。したがって「少年」たちが文章を書くことに拘わる言説に接続しやすかったという側面はあるものの、その中で「西欧諸文豪」の手になる文書が「作文の秘訣」を学ぶことができるものであり、それによって「文を作るの神髄を知る」ことができると位置づけている。すなわち、「文豪」による文書を学び、模倣することが、文書を書くことによって大成することにつながるという発想が示されているのであり、そのように文学において成功することを欲望する「少年」たちにとって、「文豪」がある種

のロールモデルとなっていたことがわかる。

三　「十二文豪」と「English Men of Letters」

このように青年期にある学生、生徒としての「少年」たちのあいだで「文豪」が語られる一方、より広い層に「文豪」という用語を流布したのが、民友社が一八九三〔明治二十六〕年に平田久『カーライル』を刊行して以降、一九〇三〔明治三十六〕年まで十年間にわたって全十二巻、号外五巻を刊行した叢書「十二文豪」だった。

唯だ文界寂寥の今日に於て、各その涯分を竭くし、以て健全にして堅実なる文学の興隆を望むの余、以て聊か祖鞭を着せんと欲するのみ。若し江湖の君子、我社区々の微衷を了し首尾能く吾人が公言したる責任を遂げしめば豈に独り我社の幸福のみならんや。

（『読売新聞』広告、一八九三〔明治二十六〕年七月十一日）

叢書の創刊に際して『読売新聞』に掲載された広告では、引用箇所の直前に「敢て世界傑出の文豪十二人を撰びたりと云ふにあらず、唯だ各〳〵その好む所、知らんと欲する所、又た知る所に就て、『十二文豪』を編纂したるのみ」とあり、北村透谷、徳富蘇峰、山路愛山、宮崎湖処子、徳富蘆花といった著者が、それぞれの興味や関心、知識に沿ってどの「文豪」について記述するかを選択したとされている。その上で引用部分では、民友社が同時代の状況を「文界寂寥」と認識しており、「江湖の君子」に対して「文豪」の事跡を広く知らしめようとする啓蒙的な枠組みが読み取られる。

特に、「十二文豪」には「The Twelve Men of Letters」という英題が付いていることから、「文豪」が「Letters」の翻訳語であることがわかる。このことは、「十二文豪」という企画が、一八七八〔明治十一〕年から一八九二〔明治二十五〕年にかけてジョン・モーレイ（John Morley, 1838-1923）が編纂し、ロンドンのマクミリアン社（Macmillan Publishers）が刊行していた叢書「English Men of Letters」がモデルになっていたことを示唆している。この叢書は、同じマクミリアン社から刊行されていた本の巻末広告に「A Series of Short Books to tell people what is best worth knowing to the Life, Character, and Works of some of the great English Writers.」（John Richard Green, *History of the English People*, vol Ⅳ, 1890）とあり、イングランドの「文豪」が書いた作品や、その人生、人物像を「people」に知らしめるという枠組みを持っていた。その結果、一冊につき一人の作家を取り上げるかたちで、『サミュエル・ジョンソン』（Leslie Stephen, *Samuel Johnson*, 1878）から『トマス・カーライル』（John Nichol, *Thomas Carlyle*, 1892）まで、十五年間で三十九冊が刊行されることとなった。民友社の「十二文豪」は、この「English Men of Letters」が持っている「Life, Character, and Works」を記述するという方法を明確に受け継いでおり、一冊につき一人の「文豪」をとりあげるという出版のあり方だけでなく、内容的にも同じ枠組みを持っていたのである。

一方でこうした叢書のあり方は、伝記的な内容が教養として流布

するものの、必ずしも「Works」を読者が実際に手に取ることまでは結びつかないという問題を内在している。

トーマス、カーライルの伝、十二文豪の第一巻として出でたり、民友社流一派の訳文口調を以て、流麗なる直訳体に訳されたり、著者は否な訳書にあらず（ママ）」と云ふやも測られざれど、此の文章口調に依て観れば著書とは受取れず、併し我国に知られたる西洋文人中沙翁麻氏等よりも馴染の新らしき人物の伝記は人の知らんことを渇望する勿論なれば、此書は時に取ての有益なる訳述なり、

（「十二文豪／カーライル」、『東京経済雑誌』第六八五号、一八九三〔明治二十六〕年七月二十九日）

「十二文豪」の同時代評では、第一巻『トマス・カーライル』が刊行されたことで、当時の知識人によく読まれていたシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）やトマス・マコーレー（Thomas Babington Macaulay, 1800-1859）のような「馴染」の「文人」以外にも触れることができるとする。一方で、「新らしき人物の伝記は人の知らんことを渇望する」とあるように、ここで求められていたのはあくまで知識、教養として西洋の「文人」についての情報を得ることであり、トマス・カーライルによる著作にまで手を伸ばすということは想定されていない。同様の枠組みは、『文學界』に掲載された書評においてより明確に見られる。

こゝに此空前のドラマテイストが伝を立つるは、コレルジ、レルシングなど眼の前にあらはれたらん心地して、出版の日もそゞに待ち遠うにおぼゆ。

（「十二文豪」、『文學界』第八号、一八九三〔明治二十六〕年八月三十日）

これによれば、「十二文豪」の読者が求めていたのは、「文豪」たちを主人公とした「ドラマテイスト」の伝記だった。コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）やレッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781）が「眼の前にあらはれ」るというように、海外で活躍した過去の偉人としての「文豪」の人生に触れること自体が主眼となっていたのである。

四　キャラクター化する「文豪」

ここで問題となるのは、このように活字メディアを通じて語られ、読者に読み取られる「文豪」像が、現実に生きていた人間のあり方そのものとは結びつかないことである。このことは一九一〇年代以降、「文豪」という用語がより広く流通するにしたがって、しだいに顕著になっていく。

まず、一九一〇年前後から二〇年代にかけての時期には、「文豪」という用語がメディアで語られる際に、いくつかの傾向を帯びるようになる。具体的には、ビョルンスティエルネ・ビョルンソン（Bjørnstjerne Bjørnson, 1832-1910）の死亡記事である「ビョルンソン氏」（『読売新聞』、一九一〇〔明治四十三〕年四月二十九日）や、ヴィルヘルム・イェンセン（Wilhelm Jensen, 1837-1911）の死亡記事「文豪長逝」（『朝日新聞』、一九一一〔明治四十四〕年十一

月二十八日）に見られるように、まだあまり日本では知られていなかった海外作家の死を報じる際に、その作家が現地では著名であることを示すために「文豪」として位置づけるというものである。また、ロシアの作家ダンチェンコ（Vladimir Ivanovich Nemirovich-Danchenko, 1858-1943）が来日した際に『朝日新聞』が連日その動向を報じた「露国文豪／ダンチェンコ氏来京」（『朝日新聞』、一九〇八〔明治四十一〕年四月二十九日）をはじめとする記事や、スペインの作家ビセンテ・ブラスコ・イバニェス（Vicente Blasco Ibáñez, 1867-1928）が来日した際の「主義の戦に半生を捧げて／投獄三十余回に及ぶ／二十三日来朝する文豪イバネッツ氏」（『朝日新聞』、一九二三〔大正十二〕年十二月十五日）をはじめとする記事など、来日した作家を権威づけるために、新聞が「文豪」として書き立てるというケースがある。

一方で注目されるのは、特に新聞紙上において海外の「文豪」について報じる際、その作家の手になる書籍やその内容についてではなく、その人物の一側面について連日のように報道が行われ、作家像を形成していたことである。

たとえばイタリアの作家ダヌンチオ（Gabriele d'Annunzio, 1863-1938）は、「西部戦場に出動し飛行機隊に参加して華々しき活動を演じ居たる伊国文豪が（ママ）ブリエル・ダンヌンチオ氏は近く羅馬に到着の筈なり」（「ダンヌンチオの凱旋／伊国の文豪飛行家」、『読売新聞』、一九一八〔大正七〕年十一月十九日）、「伊太利の有名なる文豪ダヌンチオ氏は、羅馬より小亜細亜印度香港及び支那を経て日本に向け大飛行を試む可し」（「ダヌンチオ氏／大飛行／羅馬より日本へ大文豪の大快挙」、『読売新聞』、一九一九〔大正八〕年七月二十三日）、「ダヌンチオ氏は印度迄は英国及濠州飛行家が英濠飛行計画に就て研究せる航路を取るならん」（「滋野男、伊文豪の飛行計画を評す／乗用機カポロニー型東京まで十四日間で助手と同乗せん／三十一日巴里特派員発」、『朝日新聞』、一九一九〔大正八〕年八月八日）など、第一次世界大戦においてみずから志願して戦闘機パイロットとして参戦し、その後も飛行機で世界各地を冒険する動向が繰り返し報じられた。

また、ロシアの作家スキタレット（Stepan Gavrilovitch Skitalets, 1869-1941）は、「老躯を厭はず故郷を遁れスキターレッツ（放浪）と云ふ名称の如く朝鮮から日本へかけて放浪の旅に出かけたのであると」（「圧迫から逃れて来朝する露国文豪／タゴール翁と匹敵するスキターレッツ氏／その名の如く放浪の旅」、『朝日新聞』、一九二三〔大正十二〕年六月二十四日）、「朝鮮各地を放浪して一時消息不明だつた露国文豪シキターレッツ氏はベトロフ夫人同伴で三十日午後六時半関釜連絡船慶福丸で下関に着し午後八時発特別列車で東京に向つた」（「露国文学紹介の為に／来朝した露国文豪／シキターレッツ氏昨朝下関着」、『読売新聞』、一九二三〔大正十二〕年七月一日）など、革命を目指した活動によって迫害され、世界各地を「放浪」する様が伝えられる。

一九三〇年代に入ると、バーナード・ショー（George Bernard Shaw, 1856-1950）は、日本の満州事変を擁護して「皮肉たつぷり

な言葉で連盟をこき下ろした」(「ショウ翁の皮肉／連盟をこき下す」、『読売新聞』、一九三三〔昭和八〕年二月一二日)と報じられ、あるいは「御本人が兎角有名な皮肉屋でつむじまがりと来てゐるのでチヤツプリン以上にその歓迎方法はむづかしからう」(「どう切り出す？難かしい歓迎会／はれ物ショウ翁能面で気を引く……／早大演劇博物館の苦肉策」、『朝日新聞』、一九三三〔昭和八〕年二月十八日)など、日本の満州侵出に対して好意的でありながら「皮肉屋」であるために、来日の際に扱いに苦労するだろうという憶測が、連日のように報道されている。

このように新聞紙上における「文豪」報道は、一人の人間としての作家に焦点を当てて報道する際に、ある特定の一側面だけが繰り返し語られる。このことで、報道された一面以外の多様な要素が捨象され、その作家に対するステレオタイプが形成されていく。

一方で重要なのは、このように「文豪」が新聞紙上を賑わせるとき、ダヌンチオ、スキタレット、バーナード・ショーが書いた本の内容について、新聞紙上でほとんど言及がなされていないという点であろう。ダヌンチオについては早く森鷗外が「春夕夢」(『東洋画報告』、一九〇三〔明治三十六〕年十一月)を、石川戯庵が「脚本フランチェスカ物語」(『スバル』、一九〇九〔明治四十二〕年九月号)を翻訳しており、単行本としても石川戯庵訳『死の勝利』(一九一三〔大正二〕年)や矢口達訳『巌の処女』(一九一三〔大正二〕年)、生田長江訳『死の勝利』(一九一三〔大正二〕年)が刊行されるなど、早い時期から国内でかなり広く知られていた。また、第一次世界大戦以前は、島崎藤村「仏蘭西だより／露西亜の舞踏劇とダヌンチオの『ビサネル』」(『朝日新聞』、一九一三〔大正二〕年九月七～十日)、森の人「ダヌンチオの近業「ジヨリオの娘」」(『読売新聞』「日曜付録」一九〇四〔明治三十七〕年十一月六日、十三日)、「ダヌンチオの新作」(『読売新聞』「日曜付録」、一九〇八〔明治四十一〕年三月八日)など、たびたび現地での新作公演の様子やその概要が報道されていた。しかし第一次世界大戦の戦中から戦後にかけて「文豪」として報道されるときには、それらのテクストには言及されることもなく、飛行機による冒険のみが報道されるようになる。第一次世界大戦中にダヌンチオがほとんど新作を発表していなかったことを差し引いても、その傾向は非常に顕著だと言える。

これに対しバーナード・ショーは舞台協会による翻訳「悪魔の弟子」(『ホトトギス』、(一九一三〔大正二〕年二月)、楠山正雄訳『シーザーとクレオパトラ』(世界名作文庫第十、一九三二〔昭和七〕年)、「エンゲルス・ショー・レーニン」(『改造』一九三三〔昭和八〕年四月)などは出ていたものの、雑誌、新聞記事の大半が政治的な側面から論評したり、伝記的に記述したりするもので、必ずしも多くの日本人読者が読めたわけではなかった。さらにスキタレットについても、尾瀬哀歌による翻訳詩「囚人」(『早稲田文学(第二次)』、一九一三〔大正二〕年六月)や小説「弥撒祭」(『新潮』、一九一三〔大正二〕年十一月)、「サウエート・ロシアの芸術及文学」(『改造』、一九二三〔大正十二〕年八月)、『世界短篇小説大系露西亜篇』(一九二五〔大正十四〕年)に収められた梅田寛訳「氾

濫」のような短いテクストのほかは、関口弥作訳『苔の下を潜つて』（一九二五〔大正十四〕年）などが日本語で読めるくらいだった。その中で先述の新聞記事では、現代でいうワイドショーにおける芸能人についての報道のようにステレオタイプ化された「文豪」像ばかりが報道されていくことになる。このことである種のキャラクターとして新聞の読者が作家を消費し、発信者の側も偉人としての「文豪」たちの振る舞いをおもしろおかしく書き立てるというメディアのあり方が形成されたのである。

五　「卑猥」なエミール・ゾラ

このように海外の「文豪」の行動が報道されるようになったもっとも早い事例の一つとして、「文豪」の用語が広がる以前から「仏国」の小説における「大家」とされ、やがて「文豪」と呼ばれるようになったエミール・ゾラ（Emile Zola, 1840-1902）が挙げられる。しかしゾラの場合には、ステレオタイプ化された「文豪」としてのイメージによって喚起される先入観が、その作家の手になる書籍を受容する際にも機能してしまったという問題が指摘できる。

ゾラについては早くから本間久雄や吉田精一によって[8]、明治十年代から二十年代はじめの時期においてすでに受容されていたことが指摘されてきた[9]。たしかに中江篤介訳『維氏美学』下冊（一八八四〔明治十七〕年）では「材料ヨリ構築ヨリ一ニ之ヲ実述ニ照ラシ、専ラ怪奇ヲ去リテ平実ニ就キ、読ム者ヲシテ真ニ此事有リシト思ハシム、此レ乃チ「レアリスト」ノ名ノ出ル所以ナリ、「レアリスト」トハ実事ヲ模写スルノ義ナリ」とし、フローベール（Gustave Flaubert, 1821-1880）やゴンクール（Edmond de Goncourt, 1822-1896）らと並んでゾラの名前が挙げられている。また、一八八八〔明治二十一〕年八月一二日から『国民之友』に連載された「仏国現今実際派文学者の巨擘エミール、ゾラ履歴性向一斑」で「実際派の巨擘」と紹介されたほか、森鷗外が「小説論」（『読売新聞』、一八八九〔明治二十二〕年一月三日）で「所謂自然派（「ナトユラリスムス」）」として論じている。

一方で、『国民之友』の記事では「人多くは其作の卑猥汚褻に流るゝを咎むれども、然も其の名家たることは蔽ふべからざるの事実なり」と、その小説が「卑猥」であるという側面についても触れられている。吉田精一が指摘した尾崎行雄による記事は、そうした側面がより前景化される形になっている。

> ゾラ氏は此ほど学士会員に選挙せられたるほどの名士なるが（仏の学士会員に選挙せらるゝは非常の難事にて被選者の名誉は非常に大なりと知るべし）其著書には猥褻なる者多く倫敦にて之を出版したる書肆は淫猥俗を乱るの廉を以て数日以前に法廷に召喚せられたり
>
> （学堂生「仏国の小説」、『朝野新聞』、一八八八〔明治二十一〕年十月六日）

このように「淫猥」な小説の書き手としてゾラを位置づける枠組みは、内田魯庵も「彼れ好んで下賤なる情欲の微を写し人間心裏の醜悪を暴露す、故に感情に動かされ易き論者は一読―寧ろ一見して

是を唾棄し不道徳不純潔と罵詈す。」(不知庵主人「紅葉山人の『恋山賤』」、『女学雑誌』一八七号、一八八九〔明治二十二〕年十月十六日)とするなど、文学関係者のあいだでも言説化されていた。

問題は、特に新聞紙上の言説においては、こうした「淫猥」な小説を書く作家だというイメージばかりが取り上げられるようになっていったことである。

仏国の大家ゾラ氏の著す小説は猥褻にして風俗を紊すの虞ありとて其販売を禁止すべしとの議論あるにも拘らずゾラ氏は近日また「人性の獣類」と題する新著書を公にする由なるが其書中には巴里とハーブルを連続する処のイーストの鉄道線中の事を多く載せ汽車中にて人殺のある事などもある由なり右につきゾラ氏は過日来汽車の機関車に乗り頻りに汽車の模様を探窮したりとぞ

(「ゾラ氏の新著」、『読売新聞』、一八八九〔明治二十二〕年六月二十八日)

これはフランスではなくヴィクトリア朝の統制下におけるイングランドで、Vizetelly 版の英訳本に発禁の動きがあることを報じたものであり、実際にルーゴン＝マッカール叢書(*Les Rougon-Macquart*)第十五冊に当たる「大地」(*La Terre*, 1887)の英訳本が一八八九〔明治二十二〕年に発禁になった直後には、「英国にてはゾラの小説は鄙猥なりとて太く擯斥し一般に其販売を禁止したるが昨年十月中倫敦の書肆ヘンリー、ワイゼテリーと云ふ者は同書を売りし為め法官の起訴する処となり」(「本屋の大痛事」、『読売新聞』、一八八九〔明治二十二〕年七月二八日)と、社主であるヘンリー・リチャード・ヴィゼテリー(Henry Richard Vizetelly, 1830-1894)が罰金五千フラン、三ヶ月の禁錮刑を言い渡されたことが報じられている。

このほかにもゾラをめぐっては、『読売新聞』が「ゾラ氏　エミール、ゾラ氏は仏蘭西大学の国会議員候補者なりとの噂あり」(一八八八〔明治二十一〕年八月二十五日)と報じて以降、「ゾラ氏学士会員に入らんとす」(『読売新聞』、一八八九〔明治二十二〕年十一月二十九日)、「仏国文学者の選挙競争」(『読売新聞』、一八九二〔明治二十五〕年五月二十七日)をはじめ、国会議員や学士会員の選挙への立候補についての報道が次々に行われ、「卑猥」な小説を書き、選挙に明け暮れる作家というイメージが編成されていた。

そして、こうした「卑猥」な小説を書く作家としてのゾラのイメージの形成をいち早く看取して利用していたのが、山田美妙である。

しかし突然に来た趣向でも有りません、一つ奨励の原因が有ッたからです。われ面白の至りながら一寸その仔細を爰で言ひましやう。この六月二十二日には中村座で演藝矯風会が有ッた、その時私と同席して居られたのは春廼舎主人坪内君でした。何かの話のついで、一寸今日の泰西の小説大家何某(読者諸君、あて、御覧なさい)の事に話が移り、その新作の趣向を坪内君がかいつまんで話された、それが此小説の原となりました。

(山田美妙「いちご姫」予告文、『都の花』十八号、一八八九

〔明治二十二〕年七月七日）

拙著で指摘したように[10]、ここで美妙が逍遙から借りたという「泰西の小説大家何某」の「小説」は、柳田泉が指摘した『ナナ』（*Nana*, 1879）や『ムーレ神父のあやまち』（*La Faute de l'Abbé Mouret*, 1875）ではなく[11]『制作』（*L'Œuvre*,1886）の Vizetelly 版英訳本（*His Masterpiece*, 1887）である。その上で、美妙は「読者諸君、あて丶御覧なさい」と種本が何であるか探しながら読むように読者を挑発しつつ、引用箇所の前の部分では直前でヒロインのいちご姫が「淫婦」であることを強調する。新聞紙上で編成された同時代言説に触れている読者であれば、少なくともこの種本がゾラのものであることは容易に連想されたはずであり、美妙はそのことを踏まえ、メディアによって形成されたゾラのステレオタイプ化されたイメージを戦略的に利用し、自らの小説と重ね合わせるかたちで受容されることを目論んでいたのである。

六　おわりに

これまで考えてきたように、「文豪」という用語は明治二十年代に流通するようになったものである。その際、特に「少年」たちにとっては、「文豪」が文学によって身を立てるためのロールモデルとして機能したり、「文豪」のテクストに触れることで、西洋から入ってくる新しい文学や思想に触れることができたりといった側面が強調されていた。

一方で「文豪」という用語は、新聞、雑誌などの活字メディアが広がる中で、文学、作家の通俗的な受容とも深く拘わっていた。このとき「文豪」は、小説家が書く小説を読むという以上に、偉人としての小説家そのものに焦点を当てる際に用いられるものとなる。具体的には、小説家が抱える一側面を強調することで作家のイメージが形成され、ステレオタイプ化された作家像を消費していくという受容のあり方を生み出していたのである。言い換えれば、そもそも「文豪」という用語は偉人としての作家をある種のキャラクターとして消費する際に用いられるものであり、明治期に用語として流通するようになった当初から、現代においてマンガやアニメーション、ゲームといったポップカルチャーで用いられる「文豪」と同じような受容の様態を抱えていたと言える。このとき、ステレオタイプ化された作家像の編成に終始した「文豪」言説がテクストそのものの読解に向かいにくかったのに対し、作家論による成果を踏まえ、文豪の逸話を具体的にキャラクターに織り込んでいくことが文学テクストそのものの受容にも結びついた「文アル」は、文学の受容だけでなく、読者がコンテンツを受容するときのあり方について考える上で、非常に重要な問題を示唆しているように思われる。

一方で明治期に目を戻せば、「文豪」が海外の作家だけでなく日本の作家に対しても用いられるようになることで生じた概念の変容や、明治三十年代から四十年代にかけての「文豪」言説においては、さらに別の問題が見て取られる。特に「自然主義」をめぐる議論において、文学テクストの発信者側がゾラの通俗的な受容を拒否し、文学を通俗性から切り離していた。すなわち、「文豪」をめぐる言

説との対峙の仕方そのものが、同時代の文学そのもののあり方に深く拘わっていくこととなったと考えられる。この問題については、近代における教養主義のあり方の問題や作家をめぐるスキャンダル記事の報道の問題、描写する主体の問題などとも深く拘わることから、稿を改めて具体的に考えていきたい。

注1　この点について、ゲームのプロデューサーである谷口晃平は、「できればそこから興味を持った文豪たちが実際に書いた本にも手を伸ばして欲しい。だから、文豪同士の関係性が読み取れる資料、実作を編集して、「文アル」世界をより楽しめるような内容に仕上がった『文学全集』はとても理想的なコラボレーションの形だと思います。」(「『文豪とアルケミスト』文学全集』刊行記念特集　インタビュー　谷口晃平／文豪×ゲーム×新潮社」、『波』第五七六号、二〇一七年十二月、五十頁)と、ゲーム制作の段階で戦略的に行っていることを述べている。

2　日本古書通信編集部「好評だった『文豪ゲームと初版本』」、『日本古書通信』第一〇六一号、二〇一七年十二月、二十二～二十三頁

3　服部このみ「文豪ブームの起源と変遷について」、『金城日本語日本文化』第九十四号、二〇一八年三月、四十頁

4　大杉重男「『文豪とアルケミスト』から読む徳田秋声」、『論樹』第二十八号、二〇一六年二月、一〇五頁。大杉は『「文豪とアルケミスト』に「転生」した「文豪」たち　―「徳田秋声」と「横光利一」の比較から」、『論樹』第二十九号、二〇一八年三月でも、受容者を「「腐女子」や「夢女子」」であるとしているが(六十七頁)、コンテンツ文化の女性受容者層におけるBL読者や「乙女ゲーム」ユーザーの位置づけが曖昧に規定されていることから、単純に「腐女子」「夢女子」と規定することには留保が必要である。

5　「『日本近代文学』第七十四集　論文募集のお知らせ／特集　文学にとって〈通俗性〉とは何か」、『日本近代文学』第七十二集、二〇〇五年五月、三七三頁

6　松原真「毒婦物の法廷」、『日本近代文学』第七十四集、二〇〇六年五月、十二頁

7　鬼頭七美「紙面の中の『己が罪』」、『日本近代文学』第七十四集、二〇〇六年五月、三十六～三十七頁

9　本間久雄『続明治文学史　下巻』、東京堂、一九六四年、一八一頁

10　吉田精一『自然主義の研究　上巻』、東京堂、一九五五年、一三〇頁

11　拙著『言語と思想の言説』、笠間書院、二〇一七年、一一三頁

12　柳田泉は坪内逍遥の談話を筆記した「「此処やかしこ」そのほか」(『国語と国文学』第十一巻第八号、一九三四(昭和九)年八月)において、「「ナ、」か「ムーレ和上」の二篇のうち」(七十九頁)のいずれかである という逍遥の発言を受けて、「明治歴史小説と山田美妙　解題に代へて」(『美妙選集』上巻、立命館出版部、一九三五(昭和十)年)で「此の作はゾラの『ナ、』、『ムーレ和上の堕罪』から暗示を得たものであると内田魯庵氏から聞いたことがある。」(「歴史小説集」十頁)とし、この主張を繰り返した。

附記　本稿は、二〇一八年度日本近代文学会秋季大会の特集「アダプトされた文学の可能性　平準化する人文知の受容現象を問う」における口頭発表に基づいています。会場にて質疑を頂いた先生方、および特集の登壇者である谷口晃平氏、有元伸子先生、中沢弥先生、小松史生子先生に深く感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費18K12299の助成を受けたものです。

(おおはし・たかゆき　本学准教授)